

## XVI世紀ポルトガル語の母音について

### — Fernão d'Oliveira の Gramática da ling Portuguesa に基づいて —

池 上 岑 夫

1536年にポルトガルで Gramática da Lingua Portuguesa と題する1冊の文法書が出版されました。この文法書は Fernão d'Oliveira と呼ぶ一人のポルトガル人の手になるもので、これがポルトガル語の文法書としては最初のものであり、そのことはこの文法書の最後の個所で「わたしにはひな型とすべきポルトガル語の文法書がないため、いくつかの誤りを犯していることであろう」という意味のことを述べている個所からもわかります。なおこの文法書に続くものとしては4年後の1540年に出版された João de Barros による文法書があります。これは Fernão d'Oliveira のものよりかなり小さいものですが、いちおう文法書の形を整えているといえるものです。Fernão d'Oliveira にとっては見本とすべきポルトガル語の文法書は確かになかったようですが、ギリシャ語、ラテン語の知識は十分持っていましたから——と言いますのは Fernão d'Oliveira は13才の時から10数年ドミニコ会の修道院にいたことがありまからこの二言語の文法書は読んでいたわけで、じつはこの影響を強く受けており、この二言語の文法書にみられる種々の定義の引用が随所にあります。しかし Fernão d'Oliveira はこれらの言語の文法書に盲目的に従っているわけではなくて、ある文法家はこう言っているがわたしの考えではこうだと自説を主張しているところも数多くあります。

ところでこの本は書名を Gramática としているのですが、実際はわたしたちが通常考えている文法のように音論、形態論、統語論にわたって記述したものではなくて、その一部しか扱っておりません。じつはこの著者自身が本書のなかで数回にわたって「詳細はわたしの他の著書に譲る」と言っており、その“他の著書”もすでに書き始めていたようです。<sup>1)</sup>しかし残念ながらその本は現在残ってはいませんし、その本が完成したという記録も残ってはいません。

Fernão d'Oliveira によるこの Gramática da Lingua Portuguesa は全部で50章から成っています。最初の5章は序論、次の6章から18章までが発音にかんする記述、19章から27章までが音節について、28章、29章の2章はアクセントの説明にあてられ、30章から48章までが語彙論、形態論ともいべき部分で、49章が統

---

注 1) 第49章のさいごに次のような言葉があります： … nesta derradeira parte q̃ e da cõstruiçã ou cõposiçãõ, da lingua não dizemos mais por q̃ temos começada hũa obra em q̃ particularmente e cõ mais comprimento fallamos della. (原文のまま)

語論に当たるのですが、具体的には何も述べておらず、ただ詳細は別のすでに着手している文法書<sup>1)</sup>に譲るとして最後の第50章のあとがきへ移っています。こうしてみると最も詳細に扱っているのが発音にかんする部分で、形態論から統語論へ移行するに従って記述が簡略になっていることがわかります。これは Fernão d'Oliveira 自身のいつているすでに着手しているもう1冊の文法書<sup>1)</sup>が念頭にあったに相違なく、おそらくその文法書では発音の記述は概略にとどめ(あるいは発音の部分は扱っていないかもしれません)、もっぱら形態論、とくに統語論を詳しく扱うことにしていたためと予想することができると思います。つまりこの Gramática da Língua Portuguesa ともう1冊の本で初めて文法書として完全なものにする予定であったのではないかと思われる。

わたしの発表の目的はこの Fernão d'Oliveira によるポルトガル語文法に記述されている発音にかんする部分を整理し、その記述によって当時のポルトガル語の発音、とくに母音についてその発音がどのようなものであったかを考え、さらにこの世紀のポルトガル語の発音をさらに厳密に推定するための資料の一つとして提出することにあります。

ところで当然のことながら Fernão d'Oliveira には音声学の概念はありません。したがってこの著者がポルトガル語の発音をかなり詳細に記述したのは、じつは発音の記述そのものが目的なのではなくて、この著者が主張する正書法に根拠を与えるためであったのです。そして結果的には大部分の点で伝統的な——従来一般に行なわれていた——正書法を支持しているのですが、母音についてはギリシャ文字を利用することも提唱しています。このようなばあいには問題はないのですが、伝統的な正書法を支持している部分にあってはしばしばその音価の推定が困難な場合もあります。またときにはある文字が具体的な音を示すことが目的なのか、あるいは音ではなくて文字について語っているのか慎重に決定しなければならぬ個所も多くあります。とくにこれはのちに述べますように、二重母音についていえることですが、まず母音、そのうちの口母音について述べようと思います。

## 口母音

Fernão d'Oliveira にはのちに述べますように鼻母音という概念がまったくなく、したがってそれに対立する口母音の概念もありません。ただ母音といえばもっぱら口母音のことを意味しています。

Fernão d'Oliveira によれば当時のポルトガル語には次の8つの母音——口母音のことです——がありました。:

a grande, o e grande, ω grande. i, u  
α pequeno, e pequeno, o pequeno.

i, u, には grande, pequeno の区別はないといっています。これらの母音を含む語の例として次のものをあげています: almada, αlemonha; festa, festo; fermosos, fermoso;

そしてこれらの母音の調音を次のように説明しています:

1) a, α は他のどの母音よりも口を開く。 2) e, e は a, α ほどには口を開かず歯も見せない。 3) ω, o は口のなかも唇もともに丸くする。 4) i は歯をほとんど閉じ、唇は e のようにし、舌は下の歯茎につける。 5) u は下あごに力を入れ、唇は管状にして、そこから暗い音をだす。この記述では Fernão d'Oliveira は a, α; e, e; ω,

o ; の調音の仕方をそれぞれ一括して説明して、それぞれのグループ内の差違、つまり grande と pequeno の差異については述べておりません。しかし幸いにも別の個所に grande の母音の共通点として、grande の母音の方が pequeno の母音よりも口を余計に動かす (mais movimento) という記述があり、ここから grande の母音は open の母音を、pequeno の母音は closed の母音を意味していると結論できると思います。しかし grande と pequeno はそれぞれ long と short を意味しているかもしれないという疑問も起り得るのですが、これについては音節にかんする部分に次のような記述があります： grande と pequeno とはたがいはっきり異なった音をもっているが、ある音節の長短はその母音のある音節を閉じている子音 — Fernão d'Oliveira はこの子音を semiogal と呼び、ポルトガル語には l, r, s, z の4つがあるといっている — があるか否かによるといっています。この点と、ポルトガル語の母音にはラテン語のばあいのような差は存在しないといっている点から否定されますし、ポルトガル語のすべての方言において、open と closed の区別はあるのですが、long と short の区別をもったものは存在しないこともたいへん参考になる事実であると思います。

けっきょく Fernão d'Oliveira の記述によれば、当時のポルトガル語の口母音としては a, α, ε, e, ω, o, i, u の8つがあったということができると思います。

### 鼻 母 音

前に述べましたように Fernão d'Oliveira には鼻母音の概念はないのですが、Gramática のなかにありますいくつかの記述から、口母音とは“少々異なるもの” — それがけっきょく鼻母音であるわけですが — が存在していることは感じ取っていたようです。音節にかんする記述のなかで次のようにいっています：(文字の上で)音節末に m, n をもつ音節では口と唇は開いたまゝ (soltos) にして発音するのであって、m と n はけっして音節または語 (もちろん音声学上の意味においてです) を閉じることとはない。これは経験の教えるところである。また次のようにも言っています：音節末、語末に書かれる m, n は semiogal — 前述のように音節末の子音を意味しています — ではない。このばあいこの文字はたいへん弱く発音されるのであって、ラテン人をまねて m, n を書くが、じっさいはそのどちらでもない。この文字の力 (força) はたいへん弱く、他の文字 — 音のことを意味しています — と混じえたばあいでなければ、われわれにはそれを感じることができない。また同一音節で母音のあとに m, n を書くばあいにはその代りに til を用いるべきであるといい、til の説明のところでもこのようにいっています：til は母音とともにあると<sup>2)</sup> その母音の音 (voz) を変える。これは vila, vilã とは同じ音でないことから明らかである。このばあい til はなんらかの働きをしているが、耳では感じることができのに反して、口の相違はたいへん微妙であって目にはわからない。この til を冠すると a は明るい音から暗い音 — これが鼻母音なのですが、それに気付いていないので暗い音といっているわけです — に変わり、このばあい鼻も利用している。til はたんに a の音を変えるだけでなく、e を ê に、i を in に、o を õ に、u を ù に変える。これら

注 2) 当時 til は略字を作るためにも用いられた。ex. porq̃ = porque, q̃ = que, qualq̃r = qualquer etc.

の記述から Fernão d'Oliveira 自身は鼻母音の性格そのものは理解できてはいないのですが、口母音とは異なる母音のあることには気付いていたことがわかります。また同時にこれらの記述から鼻母音が当時のポルトガル語にも存在したと結論してよいと思います。しかし問題は  $\tilde{ɨ}$ ,  $\tilde{u}$  を除く他の鼻母音, すなわち  $\tilde{a}$ ,  $\tilde{e}$ ,  $\tilde{o}$  がどんな音価をもっていたかということです。口母音のばあいには  $a, \alpha; \epsilon, e; \omega, o$ ; のように open の母音と closed の母音の区別があったことはすでに述べましたが、この区別は鼻母音には存在しなかったのか、あるいは口母音と同様、open と closed の区別があったのではないかという疑問が生じます。しかし Fernão d'Oliveira は8つの口母音を表記するのにギリシャ文字まで利用することを主張しているのですから、もし  $\tilde{a}$ ,  $\tilde{e}$ ,  $\tilde{o}$  に open と closed の区別があったら当然その点を主張して表記する方法 — 例えば  $\tilde{a}, \tilde{\alpha}, \tilde{\epsilon}, \tilde{e}$  など — を示したことと思います。しかし実際には鼻母音として挙げているのは  $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{ɨ}, \tilde{o}, \tilde{u}$  だけです。鼻母音には、口母音と異なって open と closed の区別は存在しなかったと考えられます。しかし尙問題は残ります。鼻母音には open と closed の区別がなかったとしても、この  $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{o}$  が open であるのかあるいは closed であるのかという問題です。 $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{o}$  と表記して  $\tilde{\alpha}, \tilde{\epsilon}, \tilde{\omega}$  と表記してないことから、 $\tilde{a}$  は open,  $\tilde{e}, \tilde{o}$  はそれぞれ closed の鼻母音であったと考えられないこともないのですが、また open と closed の区別がなく、 $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{o}$  はともに open またはともに closed ということになれば、とくに口母音と対応する文字を必ず利用しなければならないという理由もないのですから、上のように簡単に結論するわけにもゆかないと思います。Fernão d'Oliveira 自身がこの点について意識的に記述した部分はないのですが、アクセントにかんする記述のなかで、次のような語のばあいほどの母音も pequeno であるが、大部分のばあいアクセントは penúltimo の音節にあるとって cãdea (=candeia), zãboa (=zamboa), êtoa (=entoa), atroa を挙げています。また frangão については最初の音節は pequeno であるがアクセントはこの音節にあるともいっています。これらの記述から  $\tilde{a}, \tilde{e}$  は closed であるといえると思います。しかし  $\tilde{o}$  については残念ながら open か closed であるか推定することのできる記述がありませんが、 $\tilde{a}, \tilde{e}$  との類推から  $\tilde{o}$  も closed であった可能性はたいへん大きいと思います。現代のポルトガル語の諸方言を見ましてもこれらの鼻母音が open である方言はないので、上のような推定もまったく誤りとはいえないと思います。

けっきょく Fernão d'Oliveira の記述から当時のポルトガル語の鼻母音は  $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{ɨ}, \tilde{o}, \tilde{u}$  で  $\tilde{a}, \tilde{e}, \tilde{o}$  は closed であったと結論できると思います。

## 二重母音

Fernão d'Oliveira が二重母音として挙げているものは次の16種です：

oe (soe),	oi (caracois),	õẽ (põẽ)
oi (boi),	ou (dou),	ui (fuy)
ae (tomae),	ãẽ (pães),	ao (pao)
ãõ (pão),	ay (mãay),	ei (tomei)
eo (ceo),	eo (d's = deus),	eu (meu)
io (fugio),		

しかし例えば oe は当時の発音では [oẽ] ではなくて [oĩ] であったことは次に述

べますが、じつはその他の二重母音も発音の点では重複したものがいくつかあったと思われます。つまりここにあげた 16 種の二重母音は音声学的にいったものではなくて、文字の面からいったものではないかということです。いいかえますと同一音価をもっている文字が異なれば別のものとしてあげているのではないかということです。同一の音に 2 種 (以上) の正書法が行なわれるのは、二重母音に限らずすべての面に見られることで、これは伝統的な正書法に従っているためです。

ところでいま述べましたように、oe は [oi] であったのですが、このことは次の記述から推定できます： Fernão d'Oliveira によれば sol, roI の複数形は sois, rois でなくて soles, roles であるのは、sois, rois とすれば動詞 soer, roer の直接法二人称単数現在の soes, roes と区別ができなくなるからである。注意しなければならないのは sois と soes, rois と roes が同じ音であるということです。したがって oe と oi はともに同じ音価をもっていたと結論することができます。また ae については、l で終わる語の複数はこの l を i にして s を加えるといつて、cabeçays (sing. cabeça), reais (sing. real) と例示していますが、同じ条件でありながら、i (または y) ではなくて e を用いている形がこの文法書のいたるところに見られます。例えば vogal の複数形は当然 vogais (又は vogays) が予想されるのですが、現実には vogaes の形を用いています。したがって ae と ai はともにその音価は [ai] であったと思われます。音節副音の位置に e の文字をもつ他の「二重母音」の e の音価は、これを推定することのできる記述がないので、推定は不可能ですが、前二者の例から類推 (大胆な類推ですが) すると [i] であった可能性は大きいと思います。しかしこの点はさらに慎重な研究が必要な問題です。

次に音節副音の位置に o をもつ二重母音における o の音価についてですが、この Gramática の記述のなかにはその音価の推定のための手がかりになるような記述がまったくありませんので決定的なことは何もいえないのですが、例えば deus と deos の 2 形がともに当時あったこと (しかしこの点はあまり重要な意味をもたないかもしれませんが) といえますのは、この語は「神」の意味をもつ、キリスト教徒にとっては重要な語であつて、発音とは別に、ラテン語と同じ形の deus を使っていたのかもしれませんが。なお Espírito の他に Spirito という形も当時の文献には見られます) あるいは現在の veio (vir の直接法三人称単数過去) にあたる veo (当時の発音はすでに veio であったようです。しかし XV—XV 世紀ころまではこの語は明らかに ve-o と 2 音節の語でした) が veu という形で同時代の文献にあるという報告 — つまり veio か ve-o のはずの語が eo [eu] との類推で veu となったと思われます —、あるいは前に述べました e が i へ移ったという事実などを考えれば、この o も音価は [o] ではなくて [u] になっていたかもしれません。しかしこの点もさらに詳細な研究を必要とする問題です。

なお現在のポルトガル語の muito, mui に見られる [ui] という二重母音は当時は存在しなかったようです。XVII 世紀以後のものであるといわれています。この時代は [ui] という発音で、じつ例えば Os Lusíadas にこの muito が fructo [fruitu] と韻を踏んでいる例があります。

Fernão d'Oliveira の Gramática の記述からだけでは母音の発音、とくに二重母音の発音については不明確な点がいくつかありますが、全体としては現代の標準的なポルトガル語 — ポルトガルにあってはリスボン—コインブラのポルトガル語、ブラジルに

あってはリオ・デ・ジャネイロ・サン・パウロのポルトガル語——とあまり大きな相違はないということができると思います。しかし同時に現代の標準的なポルトガル語に比べていくつかの特徴をもっていることも確かです。Leite de VasconcelosのLições de Filologia Portuguesaに見られるポルトガル語史の区分によれば、XVII世紀初頭がPortuguês ArcaicoとPortuguês Modernoの境ということになっています。この時代のポルトガル語の特徴の一つは音節末に現われうる子音にかんするものです。Fernão d'Oliveiraによればこの位置に起りうる子音は前に述べたl, r, s, zだけで、ac, ab, adその他同様の音節ではcはu, ca iであって前の母音といっしょになって二重母音となるといっています。<sup>3)</sup>したがってこの記述に従えば当時の文献に見られるこれらの形の音節を含む語は伝統的な正書法に従っているわけです。muitoと韻を踏んでいるものとしてfructoを先にあげましたがこのfructoもその一例です。なおたいへん興味ある事実は、l, r, s, z以外の子音によって閉じられている音節をもつ語のばあい、ブラジルでは、この子音の次にiまたはeを入れてその子音とともに新しい音節を作る現象のあることです。この二つの現象に共通なことは、ともにこのような不規則な子音連続を避けるということです。ただしその方法は異なっています。<sup>4)</sup>

もう一つ現代のポルトガル語とかなり異なっていると思われる点は、アクセントのない語末(sの有無にかかわらず)のoとeの音価です。現代のポルトガルのポルトガル語ではそれぞれ[u]と[e]となり、ブラジルでは[u]と[i]となるのが普通です。しかしこのGramáticaの記述から推定しますと、この位置ではo, eは[o], [e]であったと思われます。このような推定を可能にする記述は、例えば次のような記述です：'antepenúltimoの音節にアクセントがあるばあいは、その音節がgrandeであり、penúltimo, últimoの音節がpequenoのばあいで、例えばandávamos, amávamos, árdego, ásperoがそれである。また語末のeについては、名詞の性にかんする記述のなかに次のような部分があります：almadraque, alfaceのように語末がe pequenoのばあいは男性名詞のばあいも女性名詞のばあいもある。

アクセントのない語中のo, eの音価については、uとo pequeno, iとe pequenoはたいへん近いので同一の語形をuと発音する人もoと発音する人もあり、iと発音する人もeと発音する人もあるといっています。この現象はまさに現代のブラジルのポルトガル語にみられる現象とまったく同じです。一方ポルトガルのポルトガル語では、oは[o]または[u]の発音——この点はブラジルと同様です——が行なわれているのに反して、eは[i]とはならず[e]となり、ばあいによってはこの[e]が落ちることもあります。

---

注 3) 例えば「どちりなきりしたん」(吉利支丹文学集下、朝日新聞社)に“ばうちずも”の形がある。当時はbaptismoの形とともにbautismoの形も行なわれていた。しかし発音はともに[bau'tizmu]であった。なお現代ではbatismo(ブ)・baptismo(ボ)の二つの形があるが、発音はともに[b'atizmu]である。

4) ブラジルのこの現象については東京外国語大学耕文会機関誌「耕文」(第10号)所載の拙稿を参照していただければありがたいと思います。

さいごに nasal の子音で始まる音節の前に来てアクセントのある音節の母音は、当時は open ではなかったようです。Fernão d'Oliveira によれば Alemanha, amamos, riremos の a, e は pequeno であるといっています。もしこれが正しいとすれば、この現象もブラジルの現代標準ポルトガル語とまったく同じです。現代のブラジルのポルトガル語では、amar の直接法一人称複数形は現在も過去も amamos [ɐ] ですが、ポルトガルでは amamos [e], amámos [a] です。

最初に述べましたように、いままで述べてきたことはすべて Fernão d'Oliveira の記述に基づいて推定した結果です。この時代の発音の推定にはこれだけでは極めて不十分であることはいうまでもないことです。さらに広範囲で徹底した研究が必要ですが、ここに述べましたことはそのための一つの資料と考えて頂きたいと思います。しかしここに述べましたことから (Fernão d'Oliveira の記述が正確であるという仮定に立って) いちおう予想できることは、当時のポルトガル語は現代のポルトガルのポルトガル語よりブラジルのポルトガル語の方に近かったということです。そしてまたポルトガルからこの遠い日本へキリスト教の布教のためにやって来たあの伴天連たちのポルトガル語も現代のポルトガルのポルトガル語よりブラジルのポルトガル語の方に近い言葉を話していたのではないかということです。

(東京外国語大学助教授)